藤　女　子　大　学　　No.64

図書館だより

'03.01

逸脱？それとも型破り？

阿部包（人間生活学科）

【幼い頃の記憶】

考えてみると、わたしはいつも本流から少しばかり逸脱して生きてきた。子どものころからそうだった。スコッチテリアの模様が一面にプリントされたワンピースを着たおかっぱ頭のまん丸な目をした色白の男の子。これが4歳のわたしの記憶だ。ぼくの友達は、近所の白山羊。彼女の母親は、ぼくの母親に代わってぼくに母乳を分けてくれた。ぼくの母親は、疾うに母乳の出る年齢を過ぎていたのだ。昭和26～27年ころの話である。

さて、山羊の他にいつもわたしの傍にあったのは、裏が白い広告紙と鉛筆にクレパス。中学校まで、家でも学校でも読書とは無縁に育った。幸せだった。将来に黒雲はまだかかっていなかった。青空の下には、山羊と虫たちとぼくがいた。ときに、それに馬が加わった。ワンピースを脱ぎ捨て、半ズボンと短靴を履いた少年は山羊を画き、馬を画き、芋虫や夜盗虫と戯れ、小鳥の死骸を丹念にデッサンする日々を送った。

目　　次

逸脱？それとも型破り？……1
阿部 包
紹介・『樋口一葉日記』……4
お知らせ……6